

「西行桜」

後見が、桜の枝を挿した山の作り物を大小前に置きます。



ワキ：西行

西行法師（ワキ）と能力（アイ）が登場し、西行は今年はこの庵室での花見を禁じると触れを出すよう、

命じます。



アイ：能力

そこへ、都の者達が花見へやってきました。



ワキツレ：都のものたち

禁止と言われたものの、はるばる下京からこの嵯峨の庵室へやって来た者達の為に能力は西行の機嫌が良い時を見計らって来訪を知らせます。

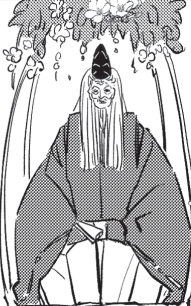


西行は仕方なく彼らを招き入れたものの、二人静かに花を眺めていたかったのに花の美しさのせいで叶わないと嘆き、これも「桜の咎」かと歌を詠じます。

やがて夜になり、都の者達は花を眺めながら眠りにつきます。



シテ：老桜の精



桜の幹の空洞から、老桜の精（シテ）が登場します。

面：石王尉



桜の精は、先程の和歌の「桜の咎」を聞き咎め、



非情無心の草木は、人間の憂き世と無関係であると説きます。

そして桜の精は

都の花の名所を挙げて、その



美しさを讃えます。

やがて夜も明け方に近づき、翁は美しい春の夜を惜しんで

序の舞を舞います。



白むと思ったのは花の色か、と思うや春の夜の夢は覚め、翁は跡もなく消えてしまいました。



画：水谷 弓